

## 実践報告

表現する力を育てる小学校外国語活動の授業づくり  
ー小学校第5学年における実践を通してー

喜多 千鶴\* ・ 林 裕子\*\*

Designing and Implementing a Lesson Unit towards the Development of Foreign Language Expressive Skills in 5th Grade Elementary School Students

Chizuru KITA\* and Yuko HAYASHI\*\*

## 【要約】

本稿では、「逆向き設計」に基づいて構成した小学校外国語活動の単元「オリジナル絵本を作ろう～留学生に日本の良さを伝えよう～」の概要と実践成果を報告する。授業中における児童と留学生とのやり取りや振り返りシートの記述内容を分析しながら、同単元で設定したパフォーマンス課題の遂行が児童の英語表現力や学習意欲に与える効果について考察する。

## 【キーワード】

表現する力, 逆向き設計, パフォーマンス課題

## 1 はじめに

平成28年1月20日に提示された「外国語ワーキンググループにおける検討事項に関するこれまでの主な論点」(文部科学省, 2016)では、育成すべき資質・能力の可視化としてi)何を知っているか、何ができるか(個別の知識・技能) ii)知っていること・できることをどう使うか(思考力・判断力・表現力) iii)どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びに向かう力、人間性等)と述べられている。今日、これらの三つの柱を主軸とし、小学校英語の教科化に向け、中・高等学校への接続のみならず、小学校に併設される「領域」と「教科」学習の接続も図る、多面的・多角的な小中連携カリキュラムの開発・検討が進められている。

現行の外国語活動では、音声面を中心とし、“Do you like...?”, “I want to be...”などの半固定的な(スロットを持つ)連語表現を「かたまり(1つの単位)」として認識し模倣する項目学習を通して、生産的な言語能力の獲得を図る(林・倉富・田中, 2016)。その中で、新たな学びへの意欲や相手意識、外国語を用いたコミュニケーションへの積極性などの情意・態度面の育成も重視しながら、コミュニケーション能力の素地を養うことが目指される。小学校英語(教科)では、外国語活動同様に音声によるコミュニケーションを重視しながら、「読むこと」「書くこと」への興味を育成することが目指される(文部科学省, 2014)。教科学習への円滑な移行を図るにあたり、外国語活動では、英語を用いて伝え合う必要性が高く児童の発達段階に応じたコミュニケーション活動を実践し、基本語彙や文構造(キーセンテンス)の「意味(meaning)」「形式(form)」「用法(use)」が三位一体となった言語認識の発達を促す指導や学習支援が不可欠である(田中・林, 2014)。そこで、本稿では、「逆向き設計」の構造に基づいた単元設計を行い、その概要と、設定したパフォーマンス課題が児童の表現力や英語への学習意欲に与える効果について以下に報告を行う。

\*佐賀大学教育学部附属小学校

\*\*佐賀大学教育学部学校教育講座

## 2 外国語活動で目指す児童像

佐賀大学教育学部（以下、本学部）附属小学校の外国語活動と中学校英語科の平成28年度の研究テーマは自ら学び続ける自律した英語学習者の育成としている。この力を小・中9年間で育成するために「逆向き設計」論を援用した単元構成を行い、パフォーマンス課題を設定している。最初に、最終ゴールであるパフォーマンス課題を設定し、どのような体験や活動がそこに向けて有効なのかを考え単元構成を行っていく。教師は「内容は何か」「最後に気づいてほしいことは何か」を考えることで、単元全体を見通した計画を立てることができる。パフォーマンス課題を解決するための単元のゴールを示すことにより、児童・生徒は、どんな英語表現を使っていけばよいのか、これからどんな学習が始まるのかを認識しながら具体的な見通しをもって学習に取り組むことができる。そこで、目指す児童生徒像を、次のように考える。

- ・ 英語を学ぶ意義や喜びを見だし、生涯にわたって英語を学び続ける
- ・ 目標達成や課題解決のために学んだ知識や技能を活用し、実生活の中でも自分の思いや考えを相手と伝え合う力を高め続ける
- ・ 自ら問いを設定し、自分に合った方法を選択しながら、その答えを追求し続ける

本研究では、小学校外国語活動において「表現する力」を育てるために、どのような手立てを行いながら授業を展開していったのかを明らかにする。「表現する力」とは、慣れ親しんだ言語材料や方略的能力を用いて交流したり、自分の思いを表現したりしていくこととである。与えられたキーセンテンスからどのように交流していけばよいかを考え、英語に慣れ親しんでいく中で、自らキーセンテンスを使ってみようとする態度を育てていく。コミュニケーション能力を育成する際には、児童が主体的に学習に取り組む態度が必要である。児童にとって価値があり、興味深いと感じられる題材を設定し、使用する英語や伝え方を工夫して表現することが重要であると考え。

## 3 単元の目標と内容

### (1) 研究対象となる学級

本学級の児童は、これまでにあいさつや自己紹介の題材に触れ、“Do you like~?”などの英語表現を使って友達と関わり合う学習を行っている。事前のアンケートでは、「友達のことが分かりもつと仲良くしようとしている」という回答が94%を占め、互いを知る楽しさを感じている様子が伺える。相手と関わり合う活動を重ねることで、相手の様子や身振りに注意を向け、推測しながら聞こうとする姿が少しずつ見られるようになっている。また、総合的な学習の時間に留学生との交流会の計画を進めており、留学生とのやりとりに対する関心も高まっている。

### (2) 単元名 オリジナル絵本をつくろう

「留学生に日本のよさを伝えよう」

### (3) 単元の概要

本単元では、留学生の方々に自分が身近に感じる日本の文化のよさを「衣・食・住」と「+1」としてもう一つ伝えたいことの四つを決め、それを絵に表し、絵を見せながらこれまで学んだ英語表現やジェスチャーを用いて伝える活動を行った。身近なものであっても紹介することは困難な課題であるため、一つのものを詳しくではなく、複数のことを伝えるように設定した。そして、そこで紹介した絵を綴じ合わせて絵本とした。

本単元では、パフォーマンス課題を設定した。単元の導入で示し、これからどんなことを学習していくのかと児童が見通しをもって主体的に臨むことができる。パフォーマンス課題とは、リアルな文脈の中で知識やスキルを応用・統合しつつ使いこなすことを求める複雑な課題を指す(西岡, 2008)。

#### パフォーマンス課題

留学生の方々は、日本の文化を知りたいと思われています。まずは、あなたが感じている身近な日本の文化を紹介すると、留学生の方々の文化への興味が高まり、佐賀での生活がより楽しくなるでしょう。そこで、あなたが伝えたい身近な日本の文化を、絵や写真を見せながら紹介し、そのよさを伝えましょう。

#### 目標

身近な日本の文化のよさについて、簡単な英語表現やジェスチャーを使って、留学生に積極的に伝えることができるようにする。

#### 単元の評価規準

ア 相手に分かるように、Show & Tellで紹介したり、尋ねたりしようとする。

【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】

イ 好きな食べ物や文化を尋ねる表現に慣れ親しむ。

【外国語への慣れ親しみ】

ウ 様々な国の食べ物や衣服にふれて日本以外の国の様子を知ったり、日本の文化を紹介することで日本のよさに気付いたりする。

【言語や文化に関する気づき】

#### (4) 単元構想

時	主な活動(○) [指導者]	主な教師の働きかけ(◎)と重視する評価規準(◆)言語材料 <input type="text"/>
1	留学生の国を知ろう ○ 自己紹介をする。 ○ 留学生の出身国の国旗クイズや文化について知る。 ○ パフォーマンス課題を知り、見通しをもつ。  [HRT・GT留学生]	◎ 留学生の出身国を国旗クイズで考えさせ、その国への関心を高めさせる。 ◎ 留学生の国の文化をShow & Tellの方法で知らせ、その国がもつ文化にふれさせる。 ◆ 積極的に相手の話を聞こうとする。【コ】 ◆ 留学生の国の文化を知り、その国の文化に関心をもつ。【気】  <div>           Hello. / My name is ○○. / Nice to meet you.            What color is it? / It's blue. / This is ○○.         </div>
2	紹介の準備をしよう ○ 紹介する方法や使える英語表現をみんなで考える。 ○ 自分が紹介したい文化の準備をする。  [HRT]	◎ 紹介に使う英語表現やほめる英語表現に慣れ親しませたり、Show & Tellの内容を考えさせたりする。 ◆ 紹介に使う表現を繰り返し聞いたり、言ったりする。【慣】  <div>           This is ○○. / What Japanese culture do you like?            Wonderful/ Excellent/ Good         </div>
3	ダウズ先生の国を知ろう ○ ALTの国イギリスの文化を知る。 ○ どれが好きか尋ねあう。 ○ 絵本を作成する。  [HRT・ALT]	◎ ALTの出身国イギリスの文化をShow & Tellで知らせ、英語表現や文化にふれさせる。 ◎ どの食べ物が好きか尋ねるゲームをする。 ◎ ダウズ先生に英語での言い方を聞いたりする。 ◆ 好きかどうかを尋ねたり、答えたりしようとする。【慣】 ◆ イギリスの文化を知り、その国の文化に関心をもつ。【気】  <div>           What food do you like? / I like ○○. / Do you like ○○?         </div>

4	よりよい紹介にしよう ○ 友達を相手に日本の文化を紹介し、互いにアドバイスを する。 [HRT]	◎ 友達に留学生に紹介する文化を知らせ、よりよいShow & Tellになるよう、観点をもとにアドバイスをさせる。 ◆ 身近な日本の文化について、相手が聞きたいと思うような紹介をしようとしている。【コ】 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">           What Japanese culture do you like?/ I like～.         </div>
5	日本の文化を伝えよう ○ 日本の文化について、紹介する。 [HRT・GT留学生]	◎ 身近な日本の文化について紹介をさせる。 ◆ 留学生に簡単な英語表現やジェスチャーなどを使って、聞きたくなるような紹介をしている。【コ】 ◆ 日本の文化を紹介しあうことで、日本のよさに気付く。【気】

#### 4 授業の実際

##### (1) ねらいを明確にした言語活動の工夫

児童は、「留学生に伝えたい」や「自分が感じる日本のよさは何か」とねらいを明確にすることにより、思いを具現化しようとしていた。振り返りカードにねらいを意識した内容を記述した児童数は、多い状態で維持されていた(図1)。児童の振り返りには、第1時は「日本のイベントや料理などのいいところを先生(留学生)に教えたい」(図2)という思いや、第3時は「まねができるのがあったら、まねをして日本の文化を教えたい」(図3)などの記述が見られ、ALTのShow & Tellが、伝えたい思いを表現するためのモデルとなっていることが分かる。

##### (2) 相手を意識した言語活動の工夫

パフォーマンス課題を遂行するにあたり、留学生に身近な日本の文化のよさを「衣・食・住・plus 1」の四つについて紹介することを決めた。例えば、すしならば「自分はまぐろが好きだ」など、自分が伝えられる内容でなければ説得力がでないと考えたからである。また、英語表現を用いて一つのことを深く伝えることは児童にとって困難であるため、既習の英語表現や方略的ストラテジー(ジェスチャーや実物の提示など)を使って四つの内容を伝えることとした児童は、これまでに学んだ英語表現や方略的方法を使って紹介している。第4時では、よりよいShow & Tellにするため、グループでアドバイスをを行った。児童がより主体的に思考・判断・表現できるように、互いのShow & Tellを「声や目線、笑顔」また「発表の内容」の観点で相互評価し合った(図4)。観点を決めて聞きあうことで、意識して聞き合い、その文化のよさを伝えるために

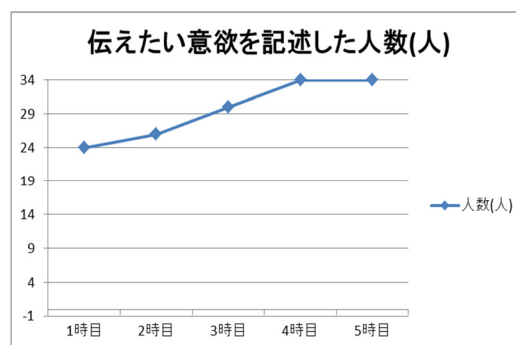


図1 振り返りカード記述にみる意欲

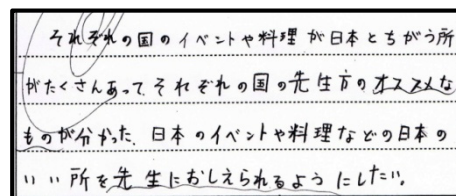


図2 第1時振り返りカードの記述

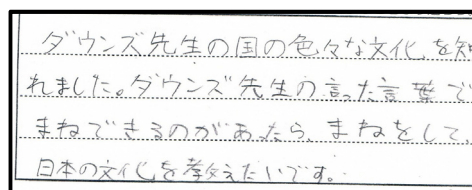


図3 第3時振り返りカードの記述

	Name	声・目線・笑顔 Good	内容 Good	アドバイス
1		☆☆☆	☆☆☆	
2		☆☆☆	☆☆☆	
3		☆☆☆	☆☆☆	
4		☆☆☆	☆☆☆	

図4 第4時ワークシート

うすればよいかと**Show & Tell**の改善につなげることができた。毎時間の振り返りカードには、めあてを3段階で自己評価できるようにした(図5)。めあてを達成できているかどうかその時間の自分の学びを振り返ろうとする児童の姿を見ることができた。

〇めあてについて	
Jump	友達からのアドバイスを参考にして、簡単な英語表現やジェスチャーで繰り返し練習した。
Step	簡単な英語表現やジェスチャーなどで伝えようとした。
Hop	紹介したいことの名前だけを伝えようとした。

図5 振り返りカード(4時目)

### (3) キーセンテンスを活用した言語活動の工夫

この単元でのキーセンテンスは、“**This is ○○.**”  
“**What ○○ do you like?**” “**It’s good.**” などのほめ言葉の3つが主として挙げられる。英語表現や**Show & Tell**の方法に段階的に慣れ親しめるように、単元構成を次のように行った。

第1時では、留学生の文化にふれ、キーセンテンスを知る。第2時では、「緑茶のよさ」を考え、それを伝えるためにこれまで学んだ英語表現を活用したり、ジェスチャーでの方略的方法を考えたりした(表1)。第3時では、ALTの国の文化の**Show & Tell**を聞いた。キーセンテンスを使った紹介であったため、児童は真似したいという思いで聞いていた(前頁図3)。第4時は、「自分が伝えたい文化」がより伝わるようにアドバイスをし合った。ここでは、キーセンテンスを記したノートや掲示物を見て、確認する様子が見られた(図6)。第5時は、留学生に文化を伝える学習を行った。

表1 緑茶の紹介を考える様子(2時目)

HRT	緑茶のよさを紹介しよう。どんなことを伝えればいいですか。
C1	<b>This is green tea.</b>
C2	においがよいと言いたい。
HRT	何かほめ言葉が使えないですか。
C3	<b>It’s good.</b>
C4	いいにおいの表情をすればいい。
HRT	みんなは、緑茶は好きなのかな。
C5	<b>I like green tea.</b>
C6	<b>Delicious.</b> (緑茶を飲むまねをしてみせる)
HRT	“ <b>It’s nice.</b> ” (ジェスチャーを添える) でも伝わるね。

## 5 抽出児童の変容にみる本単元における視点の有効性

ここでは、主に第4時でのグループ内の発表の様子や第5時での留学生との交流会の様子から、抽出児童がパフォーマンス課題を解決している様相を明らかにし、視点(逆向き設計により表現する力の向上は見られるか)の有効性を検証していく。そこで、英語を積極的に使おうとしている児童(A児)とどうやって伝えればよいかと英語表現への戸惑いが見られる児童(B児)を抽出児童として取り上げた(次頁表2)。



図6 提示した  
キーセンテンス

表2 抽出児のプロフィール

A児	B児
友だちやALTなど相手に進んで関わろうとする意欲がある。何とかして伝えようとしたり、相手が何と言っているか予想したりしながら聞くことができる。今回は、剣道を伝えようと考えている。	友だち同士の活動では、関わろうとする意欲はあるが、どんな英語表現を使って伝えればよいかと戸惑う場面がある。今回は、けん玉を伝えようと考えている。

表3 抽出時の第4時・第5時の様相と振り返りカードの記述(一部抜粋)

	A児	B児
第4時のやりとり	<p>A: <u>This is kendo.</u>  <u>I like kendo.</u>  <u>Do you like kendo?</u>①          交流会では、竹刀を持ってくるつもり。          C: いつ見せるの。          A: 初めにしようかな。</p>	<p>B: <u>This is kendama.</u>③          けん玉を見せる。          D: (けん玉を)してみたら。④          E: <u>Do you like?</u> を使ったらどう。⑤          B: おもちゃは、何というのかな。先生に聞いてみよう。⑥          HRT: <u>Toy. Japanese traditional toy.</u>⑦  <u>ALTがクリケットを教えてくれたときに、</u>  <u>“Traditional sports.”と話していたよ。</u>⑧          B: Japanese traditional toy.          OK.</p>
振り返り	<p>紹介したい日本の文化に説明が一つ以上できてよかったです。最初は、うまくいかなかったけど、最後はすらすらできてよかったです。①  <u>もっと単語を知って説明したいです。</u>②</p>	<p>ぼくは、けん玉を持ってきていて、<u>2回目の練習から見せて紹介できた。</u>④分らないところはジェスチャーを使ってできた。留学生ともうまくできるといい。<u>いろいろな英語を知れたら、もっとうまくいくと思う。</u>⑤</p>
第5時のやりとり	<p>A: This is kendo.          面を付ける。竹刀を見せる。          I like kendo.          Do you like kendo?          留: Yes, I do. Wow! Japanese samurai.          I like kendo.          A: <u>Traditional sports.</u>②          竹刀を留学生に渡す。</p>	<p>B: This is kendama.          技をしてみせる。          Do you like kendama?          留: Yes, I do.          B: Japanese traditional toy.          I like kendama.</p>
振り返り	<p>自分が紹介したい文化だけでなく、城のことも絵を見せながら伝えられた。留学生の方と楽しくやりとりしながらできてよかった。③          ※時間が余ったために、他に準備していた名城トランプを使って紹介をしていた。</p>	<p>予想以上に伝えられて、ぼくの中では大成功しました。⑥今度も「輪投げ」を伝えて楽しくやっていきたい。⑦          ※総合学習にて輪投げを紹介する予定である。</p>



表3(前項)のA児は、第4時に下線部①の英語表現を使って紹介しようとしていた。友だちからのアドバイスでどのタイミングで竹刀を見せればよいのか決めることができていた。波線①のように、英語表現を使って紹介できたことへの達成感が伝わる。繰り返し紹介したことが英語表現への慣れ親しみにつながったのだと考える。しかし、波線部②のようにまだ伝え足りないという思いもある。第5時には、留学生を前に、面をつけ紹介を行った。ここでは、下線部②の言葉が新たに加わっている。剣道のことを伝えたい思いが表現を見つけることにつながっているようだ。振り返りカードの記述には、波線部③のようにやりとりができたことや、自分の紹介を留学生が喜んでくれたことが満足につながっているようである(図7)。

表5(前頁)のB児は、第4時に下線部③の英語表現を考えていた。友だちからのアドバイスでけん玉を使うタイミングや他の英語表現の使い方を教えてもらっていた。また、下線部⑥のように分からない英語表現は聞いてみよう和前向きに取り組んでいた。第3時にALTが紹介していたイギリスのスポーツの表現を例にして、“traditional”を紹介した。児童は、うなずきながらその表現を使っていた。振り返りカードの記述には、波線部④のようにアドバイスを受けてうまく紹介できるようになったことや、波線部⑤のように英語表現を使って紹介できたことへの安心が伝わる。第5時では、相手に分かるように伝えている様子が分かる。振り返りカードの記述には、波線部⑥のように、うまくできたことへの満足感と、波線部⑦のように次回の留学生との交流会への自信につながり、その交流を楽しみにしている様子が伺える(図8)。



図7 第5時で剣道を紹介する様子



図8 第5時でけん玉を紹介する様子

## 6 成果と考察

児童の振り返りカードには、めあてに対する自己評価を3段階で評価させた。3段階評価を用いることにより、めあての達成度合いを評価できるほか、活動において、めあてを意識した取組を引き出すことができる。特に第1時と第5時の自己評価が高く、留学生との出会いによりパフォーマンス課題を達成させようとする意欲と、実際に交流し課題達成ができたという自信の高まりが影響しているのではないかと考える(図9)。

さらに、「自分のよさやがんばりに気づき、自信がついてきたか」について単元前後の意識調査を比較すると、値が上昇している(次頁図10)。これは、自分が伝えたいことを紹介できたという思いや相手に

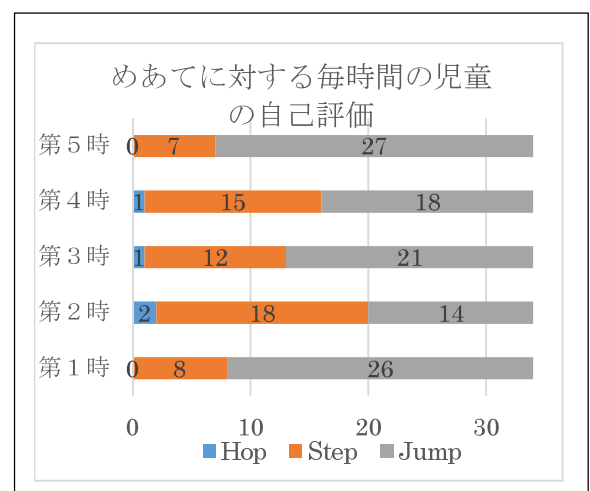


図9 めあてに対する児童の自己評価

伝わるように英語表現を考えたり、実物を見せながら話したりするなどの工夫を行うことができたからではないかと考える。

単元全体を通して、児童が伝えたいそのことばを英語で何と言えよいかと考える場面が多く見られた。それこそが、パフォーマンス課題を解決したいという意欲の表れだと考える。今回は、ALTやHRTに尋ねるという手立てをとった。辞書を活用する手立ても考えられたかもしれない。

最後に、児童のワークシートには、絵だけでなく文字を書いているものもあった。どのように書くのかを尋ねる児童もいた。使用するフラッシュカードには、文字も記載している。それを見ながら書く児童もいた。文字への関心が高まっていることが伺えることから、音と文字を一致させるためのスモールステップによる指導が効果的であることが示唆される。

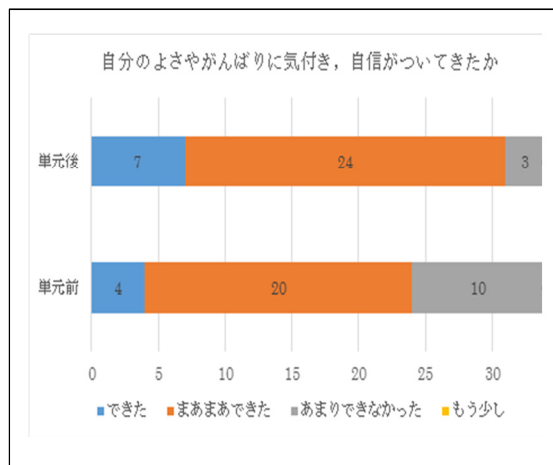


図10 単元前後外国語アンケート

## 7 おわりに

本実践では、逆向き設計の構想を用いて「表現する力」を育てるための単元構成を行い、授業実践を行った。パフォーマンス課題を設定するにあたり、児童にとって本当に伝えたい内容であるか、伝える相手は適切であるか、コミュニケーションの必要性が高い場面設定であるか、などを精査する必要がある。今単元では、日本文化の良さを伝える際に、難易度の高い英語表現の使用が必要になり、児童が活動に対して不安を抱くのではないかと懸念があった。しかし、「ほめ言葉」(図6参照)をキーセンテンスと共に活用することで(例 “This is green tea. It’s nice.”), 児童は英語表現に自らの思いを乗せながら、双方向のやりとりを進めることができていた。

単元課題の見通しと高い相手意識を持ち、言語的(既習表現, 新出表現)・非言語的の手がかり(ジェスチャー, 実物)を活用しながら自らの思いや考えを表現しようとする児童の育成に向け、今後更なる授業実践研究が必要である。

## 【引用文献】

田中彰一・林裕子(2014)「小中接続における英語習得研究—言語認識の必要性—」『佐賀大学教育実践研究』第31号, 61-72.

西岡加奈子(2008)『『逆向き設計』で豊かな学力を保障する』明治図書

林裕子・倉富裕太・田中彰一(2016)「小学校外国語活動におけるプロジェクト型授業の試み—語彙知識と外国語学習意欲に与える効果について—」『佐賀大学教育学部研究論文集』第1集第1号, 65-76.

文部科学省 2016 外国語ワーキンググループにおける検討事案に関するこれまでの主な論点URL:  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/.../1366588\\_4\\_4\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/.../1366588_4_4_2.pdf) (2016/12/09アクセス) .

文部科学省(2014)『今後の英語教育の改善・充実方策について 報告 ～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～』URL:

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/1352460.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/1352460.htm) (2016/12/09アクセス)